

総会記念シンポジウム

■テーマ グローバル化の進行とデザイン

■パネラー わたなべひろこ 川上玲子 橘 喬子 内丸もと子

■コーディネーター 寺井洋介

第8回通常総会終了後、シンポジウムが行われた。昨今、情報、ビジネスのグローバル化が進行する中で、テキスタイルデザイン業界においても、国内外問わず、テキスタイルデザインの今後の在り方、仕事に対する取り組み方について構造変化が生じている。約2時間30分の長時間にもかかわらず、インテリア、ファッションともにテキスタイルのクリエイションを重ねて来たパネラーからは、各専門分野からの活気ある発言が寄せられた。

1. テキスタイルとの出会い、その後の方向性を決めた動機について

わたなべ氏は、当初、日本染色の勉強を専攻されたが、日本の伝統に疑問を抱き、日本を客観的に見るために、北欧のインテリアデザインを学ばれた。さらに、「これからは生活の中でのテキスタイルが重要になる。」とお考えになり、インテリアテキスタイルに着手された。日本のテキスタイルビジネスについては、経済性・国際性がなければ、文化として残って行かないという御意見をお持ちである。

川上氏は、建築という分野から、主に家具を通じてテキスタイルの仕事をしているが、日本では、使う側の立場からテキスタイルを選ぶ際に「基本の物」がないことを強調しておられる。これに対して、北欧のインテリアでは、まず「基本の物」があって、家具という最終商品を作る過程に至るまで、常にテキスタイルは「基本の物」を中心にして介し続ける。

橘氏からは、ご専門であるファッションの現場からの意見が寄せられた。コスチューム作りにおいては、「ターゲット→素材→デザイン」という一連の流れが重要であり、日々の製作活動を通じて、自分なりのオリジナリティを構築して来られたとの事である。

内丸氏は、海外での留学経験を通じて、日本と海外での物の見方が違うということ、海外での授業を例に取り上げられて御説明された。その授業とは、実際に授業中に描いた図案を鏡に向けて、「これを着れるかどうか？」を生徒に判断させるものである。このような経験を通じて、デザインの先にあるものの洞察力を養い、個性を持った物づくりの訓練を行っているそうだ。各パネラーのクリエイションの基本理念については上記のとおりであるが、以後、話題は「現在のテキスタイル教育の現場」について、進んでいった。

2. 日本と海外との教育現場の違い

内丸氏からは、まず入試制度の違いが紹介された。イギリスではアセスメント（前期、後期）の2回にわたって1つの壁にすべての作品を展示する。企業、工場といった現場サイドからは、これらの作品を見に来てどの生徒と仕事をしたいか決める仕組みである。

わたなべ氏からは、まず学校自体がそれぞれのコンセプトを持っているという感想があった。せっかくクリエイターとして学校が教育しても、会社へ入ると単なるワーカーとして終わってしまう現実がある。企業側も大量生産、薄利多売でいく方向が多いのが現状であるが、これからは、少量でもクリエイティブな製作を目指す必要がある。ただし、成長していく過程で、いい仕事をしていくためのバックグラウンドがあるのかが危惧される。学校教育の現場では、デザインとの最初の接し方や問題意識の持ち方を教えることが大切であり、これらの教育が将来の仕事の取り組み方に大きな影響を与えるという印象をお持ちである。

3. 日本のテキスタイルビジネスの現状

日本のテキスタイルビジネスの現状は、プロでさえ翻弄されているというのが事実である。自分達で物を作っていくためには、テキスタイルビジネスはどうあるべきか。ユニクロに象徴される「安くて便利」なものは、ファーストフードにたとえるとマクドナルドである。ファーストフードはクイック対応で一世を風靡したが、最近では、これに相反するように「手間ひまかけた食材」いわゆるスローフードが注目されつつある。

テキスタイルにおいても、ユニクロのような色柄が少ないものに代ってもう少し、味わいのあるものが求められている。「スローテキスタイルでもよいのでは？」という考え方である。じっくりと熟成されたテキスタイル、ファッション空間がこれからは価値を持つようになるのではないだろうか。

ビジネスの実行に際しても薄利多売の方式は、結局生産の調整を間違えると在庫を残す。実行面においても「スローな考え方」に着目し、テキスタイルビジネスに取り組むではどうだろうか。

